

第5 分科会

「特別支援教育とPTA」

講 師 都留文科大学特任教授 原 まゆみ

演 題 高等部の教育実践「青春の太鼓部～一音入魂わかばの響き」

【講師紹介】

- ・現在、公立大学法人都留文科大学教養学部学校教育学科特任教授
特別支援学校教職課程の運営及び
専門科目「知的障害児指導法」「特別支援フィールドワーク2」
教職必修科目「特別支援教育概論」等を担当。
- ・日本文化大學非常勤講師、山梨県立やまびこ支援学校評議員、県立ひばりが丘高等学校評議員、北杜市立白州中学校評議員、北杜市社会教育委員、私設図書館はしば文庫主宰
- ・1981～2013まで山梨県教職員として勤務、県立わかば支援学校校長で定年退職。
- ・2013～2014まで県立こころの発達総合支援センター
- ・2014～2016まで都留文科大学非常勤講師、2017～現職。



高等部の教育実践「青春の太鼓部～一音入魂わかばの響き」

1 はじめに

○自己紹介

私は現在、公立大学法人都留文科大学で特別支援教育を担当し、特別支援学校教職課程を履修する学生の専門科目を教授するとともに、中学校、高校の教職免許取得を目指す学生に「特別支援教育概論」という科目を講義しています。この「特別支援教育概論」は、昨年度から文科省によって教職課程の必修科目とされ、全国の教員免許取得を目指す学生は必ず修得することが義務付けられたものです。学生の多くはこれまでの経験のなかで障害について深くかかわったことがなく、本講義を受けて初めて障害者の問題や特別支援教育の課題について学び、これらの問題が教員を目指す自分にとって決して他人事ではないことを理解し問題意識をもつようになります。さらに彼らは、この科目はすべての大学生が学ぶ必要があるのではないかとも述べています。このような教員養成の仕事をとおして、社会の障害者問題や特別支援教育への理解推進にもつながると考え微力を尽くしているところです。

さて、私は定年退職まで山梨県特別支援学校の教師として勤務しておりました。特別支援学校での経験は、肢体不自由教育のあけぼの支援学校、知的障害教育のわかば支援学校とかえで支援学校、盲学校で、県教育委員会の経験もあります。私が教師だった時代は養護学校義務制直後からスタートし、高等部設置、重複学級認可も進み障害児教育の充実が目指され、特殊教育から特別支援教育への転換が行われた時期です。

○知的障害校における教育実践

特別支援教育がスタートした2007年、私は担任教師として12年間を過ごした山梨県立わかば

支援学校に教頭として戻りました。そして2011年からは校長として3年間を過ごしました。18年もの長い期間を過ごしたわかば支援学校は、私の心の母校でもあります。自然がいっぱいのワイルドなわかばの空気を吸うと新たなエネルギーが湧いてきます。さあ、どんな子どもたちと出会えるのだろう、そんな期待に胸を膨らませてわかばの教育に向きました。わかば支援学校での教育実践は小学部、中学部、高等部と経験し、それぞれの発達段階に応じた教育課題について、子どもたちや保護者から多く学ばせていただきました。現在も卒業生や保護者の方々と交流があり、良き思い出と感謝の気持ちでいっぱいです。

こうした経験を踏まえ、今回の講演では特に大規模化、多様化が進む高等部教育に焦点をあててお話ししたいと思います。以下の講演内容は実践記録（原2015）を基にしたものです。皆さんと一緒に良き思い出を辿り、意義を確認したいと思います。

2 高等部の教育実践「青春の太鼓部～一音入魂わかばの響き」

○高等部の歴史

わかば支援学校は養護学校義務制に先立つ1974年、県が初めて児童福祉施設に隣接して設置した知的障害教育校です。開校時に高等部はなく、遅れて1981年に設置されました。障害のある我が子にも高等部の教育を受けさせたいという保護者の願いを背景に実現したものです。当初は定員10人で、定員を超えると重度障害の生徒は不合格となり、合格発表の日、担任は落胆する親子の姿を泣く泣く見送らなければならなかったといいます。やがて高等部希望者全員入学の願いに応えて定員は増加し、不合格を出さなくなりました。次第に地域の中学校からの入学希望者が増加し、1998年には学外入学が過半数を超える逆転現象が起きました。この傾向は益々強まっています。

こうした高等部の増加は全国的な状況であり様々な課題を山積させています。「教室不足」に代表される施設設備の問題、障害の多様化に伴う教育課程の見直し、社会参加を見据えた進路開拓や進路指導の見直し、教師の専門性の確保、等々です。2007年に教頭として着任した私は、高等部の増加と多様化に驚くとともに、わかば支援学校で学ぶと決めた生徒や保護者に充実した高等部の3年間を提供したい、との思いを新たにしました。

○新たな高等部教育のデッサン

小中学部からわかばで育った「わかばっ子」と、地域の中学校を卒業して入学してくる生徒が入り混じる高等部。新学期は混乱の時期であります。「わかばっ子」は新しい高等部生活の見通しがもてるまで時間がかかり、パニックを起こすこともあります。一方、軽度障害の新入生は重い障害のある仲間と初めて出会い、自分は彼らと一緒にここで学ぶのか…という葛藤に向き合うことになります。また軽度障害の彼らが引き起こす様々な逸脱行動に職員が振り回されると、重度障害の生徒に光が当たらなくなるといった負の側面も見られます。多様な生徒を含み込む高等部教育が求められることから、私たちは精力的な検討を経て新たにコース制の教育課程を導入しました。生活コースと自立コースです。

生活コースは「ゆっくり学ぶ」をテーマとし、障害の重い生徒がじっくり人や物と関わり、関心の幅を広げ、生活を楽しむ力を育てる青年期に相応しい学びを探求します。テンポの速い軽度障害の生徒たちのペースに振り回されず、自発的な行動を待ち、一人ひとりの特性を生かした学習活動が組立て易くなると考えました。

自立コースは「学び直しと自分づくり」をテーマとし、軽度障害生徒の増加＝就労準備教育といった単純化されたスローガンの下ではなく、目の前に立ちすくんでいる困難を抱えた子どもを深く

理解し、「どうせダメな自分」を体に染み込ませている生徒の意欲を紡ぎ出し、「わかばでいいじゃん」と思えるような魅力的な学校生活を創り出すことを目指しました。学び直しの理科で、浮力の実験の後「あれ、浮力の仕組みが分かるぞ、浮力って面白いなあ」「授業中、初めて自分の考えが言えたぞ」というつぶやきや、障害の重い同級生が親しげに身振りで伝えてくれることがなんかわかる感じがしてうれしい気持ちなど、一つひとつの体験的な学びから「分かった」を実感したり、他者の気持ちを想像したりして自分の気持ちを振り返るという積み重ねが、自分づくりの核になっていくと考えました。

○太鼓部の取組み

もう一つの教育活動として部活動があります。太鼓部は毎年、高等学校芸術文化祭郷土芸能部門に出場しています。特別支援学校枠ではなく一般高校枠での出場です。和太鼓奏者の天野宣によるオリジナル曲「萌ゆるわかば」を引っ提げて、本気で優勝を狙って出場するのです。心も体も定まらない混乱期の1年生は「やってやれないことはない、やらずにできるわけがない」のスローガンと、一心に太鼓に取組む先輩たちに憧れて入部します。演奏技術だけでなく礼節を重んじ、まずは挨拶ができるよう先輩に指導されます。始めの内は簡単な拍打ちもできない生徒たちに、顧問の教師たちは一人ひとりに合わせた指導を工夫し粘り強く向き合っていきます。週1回の練習日ではなかなか上達できませんが、保護者送迎の負担を考えると練習日を増やせないのが悩みです。高文祭前は特別に送迎の協力をお願いし、早朝練習と夏季合宿を行い補っています。

夏季合宿は重要な練習日です。新入生は1学期を終えて学校生活に見通しがもてるようになり、3年生も最上級生としての自覚が育ってきます。自分の限界に挑む合宿に耐えられず途中で腹痛を訴える1年生。2年生の雄介（仮名）は全体をリードする鐵（てつ）を任せ重い責任に耐えかねています。担当するパートの習得に苦戦して泣き出し、顧問に激励されている女子生徒や、「演奏がまとまらない、これでは高校生に負ける」とイライラしている生徒もいます。障害の程度による技術レベルの多様性に加え、生育史や生活環境も様々な生徒達をひとつの演奏にまとめ上げていくのは容易ではありません。そのことは教師だけでなく生徒自身も分かっているのです。猛暑の甲府盆地の夏、様々な葛藤を抱えながら、朝から晩まで体育館で汗だくになりながらバチを握る姿は圧巻です。障害のためにこれまでチャンスを得られなかった部活動の醍醐味を、全身で味わっているようです。

○高等学校芸術文化祭を目指す生徒の姿

厳しい夏季合宿を乗り越えると、「萌ゆるわかば」が曲らしくなってきて、2学期はいよいよ高文祭に向けたステップアップです。鐵を担当する雄介は、中学校ではほとんど言葉を発することがなく不登校気味の生徒でした。家庭の事情が複雑で祖父母に養育されており、自分の気持ちを表現することは苦手です。そんな雄介がチーム全体をリードする鐵を任せられたのですが、自信がないまま地域の演奏会に臨み、全体のリズムを崩して演奏が中断するという失敗も経験しました。雄介は小さい声だがしっかりと「鐵を自分のものにしたいので…」と言って、一人リズム練習をしていました。雄介の闘志が伝わる言葉でした。

児童福祉施設から通う佳織（仮名）は、1年生の時は締太鼓で難しいリズムに取り組んでいましたが、2年生になって笛に抜擢されました。息遣い、指使い、メロディーやリズムなど、笛は特に難しい楽器です。控えめでコツコツ練習するタイプの佳織は笛の専門家の黒田先生の指導で音が出せるようになり、「萌ゆるわかば」の前奏曲に挑戦し始めました。前奏曲は静かな雰囲気のある曲想で相応しい音色を出すのはとても難しいと思われますが、佳織はいつも笛を持ち歩き、時間

を見つけては練習を重ねていました。そんな佳織に憧れて同じ児童福祉施設の同級生も笛に挑戦し始めました。

部長の健児（仮名）は中学部の時、児童福祉施設に入所してわかばに転校してきました。当時はしばしば不安定になり教室から飛び出したり泣き出したりしていました。高等部に入ってからは随分精神的に落ち着き、特に技術が優れているわけではないが部長を任せられました。そのことで更に自信がついたようで、後輩たちへも優しく接し模範となるような行動を心掛けていました。

○高文祭出場

11月下旬、総勢42人の個性豊かな太鼓部は集大成となる高文祭に出場しました。もちろん目標は優勝です。開幕3番目はいよいよわかば支援学校。緞帳が上がり気迫を込めた礼。佳織たちによる笛の前奏曲が始まると息を呑むように会場が静まり、鐵や締太鼓が加わって演奏が萌え出すと気分が高揚してきます。丸胴太鼓や桶胴太鼓のしっかりした音と腹から出す掛け声、体いっぱいの振り姿と次々に直球で迫ってくる演奏に客席は圧倒されました。演奏が終わり最後の礼。会場は大きな拍手で盛り上がり、緞帳が下りても拍手はずっと鳴り止みませんでした。

この感動はいったい何だろう、と考えました。ちょっとぶきっちょで、うまくバチが動かない。長い曲がなかなか覚えられない。うまくいかない自分に時々溜息をつきながら…、でもかっこよく叩きたい。先輩みたいになりたい。いい音で叩きたい。練習に遅れたくない。みんなと合わせたい…。わかばの太鼓が、純粋でエネルギーに満ちていて、聞いている人の心を熱くさせるのは、そんな一人ひとりのまっすぐな心が、太鼓の音に現れているからではないか。言葉少なで、力強く、一心に打ち込む姿が人々を豊かにしてくれる。これが文化なのかもしれないと思います。この太鼓部の活動が高等部生活を充実させ、人間的に成長し卒業してからも自分を育て続ける糧となるだろう。そんなことが私の脳裏を駆け巡っていました。

○涙の反省会

4番目以降は一般高校で、少人数で細々と部活動を続けている職業高校、全国大会連続出場の伝統校、芸能教育を特化させている私立高校などが出場しました。高校生の演奏も素晴らしい技術だけでなく舞台構成や照明、演出など目を見張る部分がたくさんありました。それでも3位入賞は不可能ではないと思われました。会場の拍手は断トツの1位だったのですから。

しかし成績は5位でした。今年もまた一般高校に食い込めていないのです。これだけ観客の胸を打つ演奏でも審査員の得点には結びつかない。悔しさを抱えて表彰式を終え、控室で反省会です。この日を最後に引退する3年生が一言ずつ挨拶をします。

「優勝の夢を叶えられなくて悔しいです」「来年はがんばって優勝して全国大会に行ってください」「いい仲間と一緒に演奏できてうれしかったです」「後輩にやさしく教えてあげてください」

皆、泣いています。顧問も泣いています。がんばった生徒の姿に感動し、高校を超えない悔しさに泣いています。わかばの太鼓部は「一音入魂」を部訓とし、全国大会出場の大きな夢に向けて「やってやれないことはない、やらずにできるわけがない」と、苦しくても仲間と一緒に挑戦する心と体を育てています。卒業生は顧問から繰り返し聞いたこの言葉を胸に刻んで巣立っていくのです。

わかば太鼓部の活動はテレビ山梨のドキュメンタリーフィルム「一音入魂～わかばの響き～」として放送され、平成22年度JNNネットワーク協議会のネットワーク大賞を受賞しました。1年間密着取材したスタッフの岩崎亮（岩崎2013）は、「わかば支援学校には仲間と助け合ってやり遂げる姿、先生と生徒がお互いに信頼し合って成長していく姿があります。私たち“健常者”と言われ

る人々が学ぶべき、学校教育の本来の姿が、この学校には存在するのです」と述べています。

○学校から社会への移行を支援する

部長の健児は卒業と共に児童福祉施設を退所し、県内のA支援学校の業務員として働き始めました。これは県教育委員会が障害者雇用促進のため知的障害者を支援学校の業務員として雇用する新制度「チャレンジ雇用」です。県内で10人雇用されており、わかばでも採用しているが、健児は自宅から通えるA支援学校に応募し採用されました。ベテランの業務員さんに丁寧に仕事を教えてもらい、施設管理や清掃など一生懸命働くので大変高く評価されていました。

笛を担当した佳織は進路選択の難しさに直面しました。児童福祉施設を退所するため、グループホーム探しと並行して進路開拓が必要です。一般企業の障害者雇用が決まり苦戦していた折、ドキュメンタリー番組で太鼓部の活躍を知ったC老人介護施設の役員が来校しました。そして卒業生の社会参加を促すことは大切なことと考え、介護の助手としての雇用を検討してくれることになりました。佳織はC老人介護施設に実習に行きました。初めて足を踏み入れる老人介護施設で、大変緊張しながらの実習だったと思います。しかし、いつも笑顔で礼儀正しい佳織への評価は高く、介護の現場は任せられないが助手的な仕事を切り出せば採用できる、できればヘルパー2級の資格を取得してきてほしいと申し出がありました。

○介護助手の職域開拓

この申し出を受け、今後も介護の職域での採用に可能性があると考え、ヘルパー2級取得の方法を検討しました。当然、特別支援学校高等部普通科に資格取得の教育課程は置けません。県の進路指導主事会で紹介のあったヘルパー講習の会社に相談したところ、知的障害者の社会参加の道を開く必要があると前向きに受け入れてくれました。早速、希望する生徒、保護者に紹介し10人程が申し込みました。佳織も入所している児童福祉施設の協力を得て受講しました。ヘルパー講習は一般成人や高校生と一緒に内容です。果たしてわかば支援学校の生徒が修得できるだろうかとの心配があり、希望する職員も生徒とともに受講し、私も受講しました。講義中にウトウトすると生徒に「校長先生、居眠りはダメでしょう」と大きな声で注意されたり、車椅子移乗などコツのいる介護に苦心して励まされたりしました。生徒たちは担任に通信課題をサポートしてもらい、施設実習も経て、全員が無事資格を取得しました。佳織も資格を取り、晴れてC老人介護施設に就職しました。

佳織が老人介護施設に就職して3年目を迎えた頃、友人からうれしい電話がありました。友人の実母は高齢でC老人介護施設に入所し、佳織に担当されているというのです。友人は施設を訪問するたびに優しくて素晴らしい介護士さんだなと思っていて、話しかけたところ、わかばの卒業生と聞いて感動したことでした。他の介護士に遜色なく仕事に取り組んでいると知り、私も成長ぶりに驚きました。高等部での学習や部活動をとおして蒔いた「自分を育てる種」が芽吹いたのでしょうか。まさに「萌ゆるわかば」そのものだと思いました。

わかばは毎年夏に同窓会を行います。1974年の開校から46年が経過し高齢の同窓生もいます。毎年200人を超える同窓生が母校に集まり、カラオケやゲームを楽しみ、和太鼓「萌ゆるわかば」の演奏を楽しめます。卒業して何年も経っているのに生き生きと体が動き現役時代に戻ったようです。輝く青春の高等部が再現される一瞬なのですが、昨年からはコロナ禍のために同窓会が開催できず大変残念です。

3 おわりに

高等部部活動の取り組みをお話してきましたが、特別支援学校高等部で生徒たちが自分を育てる種を蒔き、自分らしい社会参加の姿を見せてくれることは、大きな喜びです。上述の太鼓部の卒業生たち以外にも、色々な存在の仕方で社会参加している卒業生がいます。例えば、Mさんは卒業後に企業に一般就労しましたが、離職して生活を崩してしまいました。しかし福祉の支援を受けて生活を立て直し、数年後に職を得て結婚もして子育てを頑張っています。Yさんは高等部の頃はいつも自信がなさそうな生徒でしたが、地元の温泉ホテルに就職して17年間も厨房の仕事をやり遂げていました。Yさんは重度の障害があり入所施設で暮らしながら、絵画教室で素晴らしい作品をたくさん描いています。ご両親はそのたくさんの作品を前に改めてYさんの作品の価値に気づき個展を開催されました。Yさんの描画はその見事な色使いと筆遣いが、見る者に生きるエネルギーを伝えています。卒業生はそれぞれ自分らしい生き方や暮らし方をしていて、保護者の方々も成人した我が子との暮らしを楽しんでおられます。そんな姿に日常の小さな幸せがあり、高等部卒業後の様々な生き方があることを教えられています。

私の講演は以上です。拙い内容ではありますが、特別支援学校に在学中の保護者の皆様がひと時立ち止まって、子どもさんの将来を考える一助になれば幸いです。お読みいただきありがとうございました。

〈文献〉

- 岩崎 亮 2013『JNN情報誌ネットワーク NOW 2013 春号』
原まゆみ 2015「輝く青春の太鼓部～一音入魂わかばの響き」雑誌『教育』10月号
_____ 2005『マサの卒業と高等部教育』群青社
_____ 2013「特別支援教育とキャリア教育」『精神科治療学』第29巻 星和書店
_____ 2017「社会参加に躊躇する若者の回復と学びの場の創造
—制度の狭間を支える「かけはし学校」の試みー」臨床教育学研究第5巻
_____ 2021「発達障害等のある若者の学校から社会への移行期支援に求められるもの
—思春期キャリア支援プログラムの実践検証をとおしてー」

放送大学大学院修士論文
以上